
ひと夏の想い……

日向 夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと夏の想い……

【Nコード】

N8729J

【作者名】

日向 夕陽

【あらすじ】

いつもの山に散歩に来た数馬の前に独りの少女が現れた。

その少女は迷子になっているらしく、一人で山に登りに来たと言う

……

数馬はそんな少女に見覚えがあった

無事に少女を家まで帰せるのか……

追記／何も知らぬまま書いた初期（小説書き初めて）の作品なので、
小説の作法が守れていません
【一人称三人称ごちゃ混ぜ】

ある夏の少女：

ミ〜ン ミ〜ン

数馬は近くの山に散歩に来ていた。

その時にふとそれが、

目にはいった。

頂上近くの遊具がある

広場のブランコに

揺られている

小さな背中。

なぜだかわからないが

数馬はその小さな背中が気になった。

「どうしたの？」

数馬がそう声をかけるとその少女はこちらを向いてこう言った。

「迷子になっちゃったの」

少女は泣いていたのか両目が少し赤い。

「お父さんとお母さんは？」

「ううん、一人で来たの。」

そう聞いてから数馬は声をかけたことを後悔した。

そもそもなぜ僕は彼女に声をかけたのだろう。

少女は数馬がそんなことを考えてるとも知らず

「お兄ちゃんは誰？」

そう聞いてきた。

あまり答えたくなかったのだが、答えなければ少女の機嫌を悪くし
そうでつい：

「お兄ちゃんは数馬って言うんだよ。」

元氣よく答えた。

「数馬お兄ちゃんね、
わかった。」

私の友達と名前一緒だね。」

少女は嬉しそうにそう言った。

友達と一緒になのか：

変な偶然もあるんだな。

数馬はそう思いながら微笑む少女を見ていた。

「そういえば君の名前は？」

「私はみのり、かしわぎみのり。」

みのり……

どこかで聞いた

名前だなあ

まあいいか。

「じゃあみのりちゃん。家はどこかな？」

「わからない。」

「じゃあどうやって来たの？」

「…わからない。」

みのりは不安そうに呟く。

「独りできたの？」

「うん…。」

「うーん、まいったな。」

このまま独りにするわけにもいかないし…

そうだ、警察に頼もう。

そう思い携帯電話を

見てみると圏外だった。

仕方ない、

歩いて山を降りて

ふもとの交番へ連れていこう。

数馬がそう考えていると後ろからみのりが、

「お兄ちゃん、

私山降りれたら

お家の場所わかるよ。」

そう言った。

「じゃあお兄ちゃんと一緒山降りようか？」

「うん。」

少女と手を繋ぎ

山をおりだす二人。

「これ一歩間違えたら
誘拐だよな…」

「お兄ちゃんどうしたの？」

「いや、なんでもない…」

ある夏の記憶…

少女と歩きながら数馬は懐かしいことを思い出していた。

※

小学生の頃、

学校が終わったたら友達とこの山に遊びに来ていた。

最近山で遊ぶ子供は少なく散歩していても子供は見ない。

でもその時はたくさんさんの友達で山を駆けめぐった。

自分でもよく山に遊びに行っていた子供だと思う。

それに昔はまだこの山も整備されてなかったから道路もなくて自然を直に味わえた。

「数馬」

今から鬼ごっこな」

「何、じゃあ俺が

鬼だからみんな覚悟しとけよ」

「よっしゃ、」

「数馬が鬼なの。」

「みんな早く逃げないと鬼にタッチされるぞ。」
※

あの頃の事は今でも
鮮明に思い出せるぐらい楽しかった。

「ってなんで今さらそんなことを思い出したんだろう」

「？」

考えていたことを声にだしてしまっていた。
しかもそれをみのりに聞かれていたので少し、
恥ずかしかった数馬だった。

ある夏の不思議…

「それにしてもよくここまで一人で来たね。」

小首を傾げる少女に
聞いてみる。

「いつもここで遊んでたから…」

この山は都市部の真ん中に位置するから
今時山で遊ぶ子は
珍しいなあ。

俺らの時は…
などと数馬が思っていると

「でも今日は途中から変だったの……」

少女は言いながら顔を俯かせた、

「いつもはみんなが、
しおりちゃん

あべくん

にしはらくん

みきちちゃん

かずまくん

がいるのに今日はいないの、それに道も変わってて…
それで迷子に…」

「大丈夫だよ。」

数馬はみのりを励ましながらかえごとをしていた。
さつきみのりが言っていた名前には全部覚えがあった。

それに

“かしわぎみのり”
って……

「ねえ、
みのりちゃん？

そのかずまくんって、
名字なんていうのかな？」

「えーと、“にしの”、にしのかずまくんだよ」

やっぱり、

数馬はなぜその少女に
惹かれたのか
わかった気がした。

ある夏の恋…

数馬はいろいろ
考えていた。

少女“みのり”の正体や今自分が置かれている状況について。

考えていると

また懐かしい思い出が

蘇ってきた……………

※

「タッチ、阿部の鬼な」

「くそ、数馬め、茂みから出てくるとは…」

「阿部、ドンマイ。」

「西原、お前どこにいたんだ？」

「阿部を盾にしてた」

「お前…」

待ちやがれ…」

「西原君頑張れ」

「はっ、美紀ちゃんから応援してもらいやがって。ゆ、許せん」

「阿部落ち着け」

「ハハハ、西原ドンマイ。」

「ちょっと、

数馬助けてくれ」

「こっち来んなよ。」

「待て二人とも」

俺と

ガキ大将の阿部、

イケメンの西原、

強気の美紀

あと

大人しい栞

そして

柏木みのり

このメンバーで

いつも遊んでいた。

西原や阿部と鬼ごっこしたり、栞や美紀と話しをしたり、

みのりと遊んだりしたことをまだ覚えている。

あの頃はまだ自覚はなかったのだけど、俺はみのりのことが好きだった。

いつも一緒に遊んで笑って楽しかった。

いつものメンバー

みのり

とずっといられると

その時まででは思っていた。

ある夏の場所…

「お兄ちゃんどうしたの？」

「ああごめん

ちよっと考えごと。」

「お兄ちゃん変なの」

みのりはさっきまでの落ち込みが嘘のように、
そう言った。

「あれ？」

「お兄ちゃんどうしたの？」

「いや、え……」

考えごとをしていたせいか自分がどこにいるのか分からなくなっていた。

おかしいな、

ほぼ毎日散歩していたから迷うはずないんだけどな。

「えっとな、ここは…」

どこだっけかな？

「お兄ちゃんここみのりわかるよ。」

数馬が悩んでいると
みのりが数馬の手を

引っ張りそう言った。

いつもは見ない場所だがどこか見たことのある場所だと思えながら数馬はみのりに引っ張られる。

「お兄ちゃん、もうちょつとしたら、みのり達がいっつも遊んでる場所に着くよ。そこならみんないるかも。」

そう言われた瞬間、

数馬は何かに気づいた。

どこか見覚えのある場所だと思ったら……

そうだ此処は…

ある夏の背中…

数馬達が着いたのは遊具も何もないちよつとした広場だった。端の方にはおもちゃや棒切れ、木の枝が転がっている。

「懐かしいなあ」

数馬は思わずそう口に出していた。

「え、？」

「いや、何でもない。」

「変なの」

みのりがそう言ったあと

「あれ？みのりちゃん？」

後ろからみのりと同い年くらいの子供が出てきた。

「かずまくん、よかった」

そう言ってその少年、
かずまに抱きついた。

「え、え？」

その少年は抱きつかれてかなり動揺している。
顔が真っ赤になっていた。

みのりがかずまから離れ

「お兄ちゃんありがとう。」

そう言った時、

かずまはこちらに気づいたのか

「みのりちゃんのお兄ちゃん？」

と聞いてきた。

「ううん。」

違うよ。みのりちゃんが迷子になってたから、
ついてきてあげただけだよ。」

「そうなんだ。」

かずまは納得したのか、そう言ったあとはもう何も言わなかった。

「おい数馬。」

「え？」

「あっ阿部。」

「阿部君。」

数馬はかずまを呼ぶために出されたその声に振り向いてしまった。

だが、あとの二人は気づいてないみたいだ。

「おい阿部君」

そう言って駆け出したみのり。

「み、みのりちゃん」

かずまもみのりの後を追う。

ガシッ

「あっ」

「え？」

数馬は自分でも知らない内に幼き日の自分を掴んでいた。

「あの？」

何？お兄ちゃん」

少年はそう言った。

「かずま君、

後悔しないように
みのりにちゃんと伝えよ。」

「え？」

そう言ったあと数馬は駆け出していた。

少年はその後ろ姿をずっと見ていた。

ある夏の涙…

※

あのお兄ちゃんは
誰なんだろう？

「かずま君？」

「え、あ、みのりちゃん………と阿部。」

「よう数馬。」

あとから西原とかも来るってよ。」

「うん。」

「どうした数馬？」

「何でもない。」

「そうか。」

「かずま君、お兄ちゃんは？」

「えっと、帰っちゃたよ。」

「そうなんだ、
さよなら言いたかったのに…」

「何、何？数馬、みのり。お兄ちゃんって誰だよ？」

「お兄ちゃんはね、迷子だったみのりを送ってくれたんだ。」

嬉しそうなみのりちゃん。

僕は気になったのでつい聞いてしまった。

「本当にみのりちゃんのお兄ちゃんじゃないの？」

「うん。」

さっき知り合ったからね。」

「さっき知り合ったのかよ」

阿部は呆れたように呟いた。

それでも僕は気になった。

「ふん。」

じゃあ名前はなんていうの？」

「お兄ちゃんの名前はねくく
かずま君と同じ

“かずま”だよ。」

「マジかよ。」

凄い偶然だな。

なあ数馬？」

「……………」

「数馬…？」

「え、そうだねびっくりしたよ。」

「大丈夫？
かずま君？」

みのりがそう言った瞬間、

「阿部、何先に行ってたんだよ。」

「西原君待つて。」

「美紀ちゃんも待つてよ。」

※ 西原と美紀と栞が来た。

「おっいいところに来たな。西原、今日は不思議なことがたくさんあるぞ。」

「おっ、何何？」

「みのりがさ、
道迷ったんだ…」

「みのりが、私達が道迷ったことなんて今まで一度もなかったのにね。」

「ああ、確かに。…」

「美紀、話しに勝手に入ってくんな。西原、最後まで聞けよ。」

「えつゝと、あべ君、私が迷って…それで…」

「ああ、悪いみのり。んで、続きだが、みのりが迷ってたら年上の男の人が助けてくれたんだ。」

「みのり、まちかそれ？」

「うん、そだよ。」

「みのり、かっこよかった？」

「え…それは…」

「その反応はかっこよかったな」

「違うよ。」

「待て待てみんな、まだ続きがあるんだ。」

「なんだよ阿部、早く言えよ。」

「その人の名前、数馬と一緒にだったんだよ…」

「え…」

「え…」

「え…」

みんながかずまの方に向いた

※

阿部と栞と美紀が後ろで何か話していたが

何か胸の奥がもやもやしていて話しをする気分ではなかった…

みのりの言っていた

自分と同じ名前の人が

気になっていた。

それに…

最後に言われた

あの言葉…

後悔しないように…

そう思った瞬間、

なぜか悲しい気持ちになっ
ていた：

「かずま大丈夫か？」

「え？」

振り向いて見ると西原が心配そうに見ている、
その後ろにはみんなが
こちらを見ていた。

「何かあったのか…？」

「いや、何もないけど…」

そんなに心配しなくても大丈夫だって：

そう言おうとしたが：

「数馬、お前涙出てるぞ。」

言われて気づいた：

俺は泣くほど悲しかったのだと：

「今日は謎が多いな。」

泣く数馬も追加だ。」

「なんだよそれ。」

俺は泣き笑いながら阿部に言ってやった。

どうして悲しかったのかはわからないが…
“今”は考えないことにした。

「泣いたり笑ったり忙しい奴だなお前は…」

西原が呆れたように呟いた…

※

ある夏の真実…

数馬は少年達がいる場所からずっと走りっぱなしだった。

「ハア…ハア…」

落ち着け自分。

そう自分に言い聞かせた。

※

これは数馬の自分で封印していた思い出だった。
いつも一緒にいられるものなどこの世にはひとつもなかった…

いつものように学校に行くと先生がこう言ったのだ。

「昨日、柏木さんが亡くなりました…」

え？何？

そのときは

イマイチ何がなんだかわからなかったが、
いつも一緒にいた人が消えてしまった

と後で思わされてしまった。

いつもの場所に行っても一人足りないのだ。
いつものメンバーで集まることは二度とない…

※

今になって

何故思い出したのか…

それは今日の出来事が原因だとすぐわかった。

もう会えない人に

行けない場所に

戻れない過去に

触れてしまった。

みんなで遊んだ

あの場所は数年前に

工事でなくなり

道路ができてしまった。

みんなとはみのりの死をきっかけに会っていない。

俺は友達を作るのが

怖くなってしまった。

いついなくなるか
わからないし

その時の悲しみが
怖いからだ：

なぜ今日みんなと

会えたのか

わからないけれど

友達というものは

とても暖かい。

俺は幽霊など

信じないが

みのりが今日の出来事を起こしたのなら

何か意味があることだと思った…………

ある夏の……

目が覚めると…

あの少女に会った

ブランコに座っていた

いつのまに寝ていたのかそんなことはどうでもよかった。

「よっと。」

ブランコからジャンプする。

「うわぁ。」

何かにつまずいて
こけてしまった。

「これは…」

そこには

あの場所にしかない

名前入りの

棒切れが転がっていた。

その瞬間、

視界が滲んだ。

「ありがとう」

そう呟いて、

俺は山を降りることにした。

阿部

栞

西原

美紀

久しぶりにあいつらに
会ってみよう。

まだ、俺を友達と
思ってくれているか
わからないけれど…
会ってみよう。

俺には未来が
あるのだから…

そう心に強く思った。

※

数馬が去った

広場には

“みのり”と名前の入った棒切れが風で草むらへ転がっていった。

「さよなら…

元気でね…。」

FIN

ある夕暮れに…

きっかけはふとしたこと。

なぜならきっかけはしょせんきっかけだから。

※

ある日の朝。

いつも通り新聞に目を通す。

一面に大きく野球選手についての記事が記されていた。

ま、俺は野球には興味ないから読まないけど。

それでも一応目を通す。

んー、やっぱりおもしろくないなあ。

「どうかしたの？」

不意に掛けられた声に、俺は新聞から目を離した。

そこには手で口元を隠しながらクスクス、っと子供っぽく笑う妻

の姿があつた。

夫の俺が言うのもなんだが、綺麗だ。

綺麗過ぎる。

「いや、別にないけどな」

再び新聞に目をやる。

そこである記事を見つけた。

その記事は端の方で小さく記載されていた。

「こら」

不意に頭を左右から捕まれた。

「な、なんだよ」

「何難しそうな顔してるの？」

知らない内に妻は俺の後ろから覗き込む様な体勢に入っていた。

気配すら感じさせないとは……。

「どれどれ……」

そう言って、俺の右肩から乗り出す妻。

「何もないなあ」

一通りの記事に目を通したのか、肩から離れ妻が言った。

※

会社帰り、夕暮れ時、カラスの鳴き声、空が暁に染まるこの時間帯。

俺はこの時間帯が、この空が好きだ。

なんだか世界に一人だけの様な錯覚を覚えたりする。

大きく息を吐いた後で、視線を空から目の前に戻す。

古く懐かしい公園がそこにはあった。

山の中にあるその公園は、木々が生い茂っているため夕日が遮られて、薄暗い。

「無くなっちゃうのか……」

錆び付いたブランコに腰掛けながら、淋しく呟く。

独り言。

誰に言う言葉ではなく、自分自身に言い聞かせる様な、問い掛ける様なぼやき。

今この公園には俺しかない。

なので、もちろん返事は返ってこない。

だから、自分自身に問い掛ける。

「なんだかちよっと寂しいよな」

此処はただの公園ではない。

いわゆる俺にとっての思い出の場所だ。

まあ、俺達と言った方が正しいかもな。

そんな場所になぜ俺が来たのか。

それは……。

自分の鞆から一枚の紙を取り出す。

それは、仕事で使用する資料でも、コピー用紙でもない。

ただの、今朝の新聞だ。

その中のある記事に目をやる。

ある公園を撤去するらしい。

そう。

此処がその公園だ。

偶然にも俺は、その記事を読んできました、そして此処に来ていた。

何年ぶりかはわからない。

でも、かなり久しぶりだ。

此処にはもう来ることがない。

まあ、仕方ない。

※

一通り公園を回ってもう帰ろうとした時だった。

入口の方に見覚えのある人物が数人。

来ていたのか……。

俺にとって懐かしいその人物達。

俺が手を振ると、向こうも気がついたようだ。

久しぶりに、懐かしい場所で、旧友と再会できた。

そんな、夕暮れ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8729j/>

ひと夏の想い……

2011年10月6日17時14分発行